

出雲市田畑遺跡出土の弥生土器について

田中義昭*・宮本正保**

On the Yayoi pottery from Tabata Site in Izumo City

Yoshiaki TANAKA and Masayasu MIYAMOTO

I 緒 言

1984年より、簸川郡斐川町荒神谷遺跡における弥生時代の青銅器群の発見を契機として、この青銅器群を保有した地域集団のありように対する関心が高まってきている。問題の所在は、斐伊川・神戸川が形成した出雲平野において、弥生時代にあってはどのような政治的地域集団が生成・展開したのかということにあるが、そのような問題の解決にとっての基礎的な作業としては、平野に散在する弥生時代の集落遺跡の分布状況とそれらの消長過程、相互関係をトータルに把握すること、さらに特徴的な集落遺跡の構造を解明することなどが考えられる。

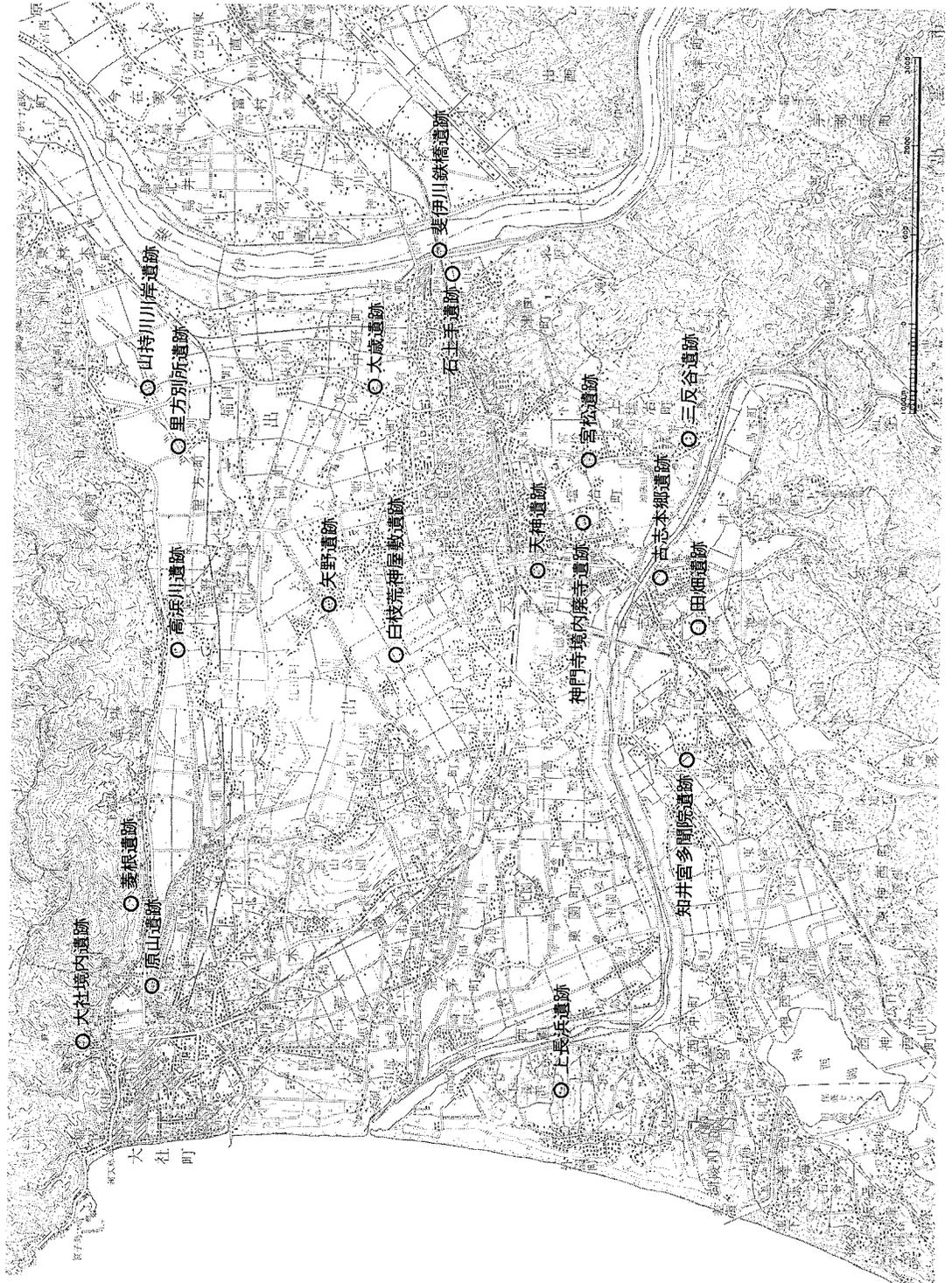
われわれは、1986年から出雲平野の中核的な弥生時代の集落址と目される出雲市矢野遺跡に対する発掘調査を行い、同時に広汎な分布調査を実施して当該の問題解明を進めてきた。これらの中間的な総括についてはすでに報告したところであるが、¹⁾ 弥生時代の地域集団の全体像にかかわる研究は、目下鋭意取組み中である。

* 島根大学法文学部考古学研究室

** 島根大学法文学部考古学専攻生

ところで集落遺跡の変遷過程の究明に当たっては弥生土器の地域的な編年の確立が一つの前提となることは自明である。近年中海・宍道湖沿岸の低地に立地する弥生時代の遺跡の調査が進み、弥生土器の編年に関する成果が蓄積されてきている。しかし遺構と土器の共伴関係の把握がこれらの遺跡において一般に困難であることから、細別については問題を残していると考えられる。とくに出雲平野の諸遺跡においてその感が強い。われわれが現状でよるべき資料としてあげるのは、出雲市知井宮多聞院遺跡における層位的な発掘事実がほとんど唯一であろう。しかしこの遺跡における層位的事実と土器型式の対応関係の認識はすでに歴史的なものとなっており、今日の研究上の要求を充たしうるものではないとしてよい。²⁾ したがって当平野における弥生土器の編年の確定は、弥生時代の地域集団の構造と相互関係を解明するためには急を要する課題となっている。

ここに取り上げる出雲市田畑遺跡は1972年に発見された弥生時代中期の集落遺跡であるが、発見時に数10点の弥生土器が採集され、それらが島根大学に一括保管されている。この土器群は出土状況が不明のために個々の共伴関係はまったく定かではないものの弥生時



第1図 出雲平野の主要な縄文時代・弥生時代遺跡位置図

代中期の一段階を表示する特徴を備えており、その意味で詳細な検討と編年上の位置付けが求められるのである。このことは他方では田畑遺跡をして神戸川西岸における弥生時代集落の展開過程に位置付け、同じ自然堤防上に占地する古志本郷遺跡、知井宮多聞院遺跡等との集落の相互関係を明らかにするうえでもきわめて必要な作業となる。

折から1988年11月より出雲市教育委員会によって当の田畑遺跡の範囲確認調査が実施され、これまでに多数のピット群、溝状遺構、住居址等の存在が判明したようである。田畑遺跡におけるこうした集落関係遺構の検出は出雲平野の弥生時代の集落研究に新たな事実と検討課題を提示したものといえよう。本稿は田畑遺跡に関するそうした調査・研究の近況に一助を加えんとするものでもある。

II 田畑遺跡の研究小史

田畑遺跡は行政区上は出雲市下古志町田畑に属している。占地地形は神戸川の西岸にほぼ東西に延びる自然堤防で、遺物の散布範囲は東西100m、南北50mとされている。遺跡の発見は、冒頭に述べたように1972年のことで、そのきっかけは神西・神門地区田圃整理工事による水路の開削にあった。この水路はちょうど自然堤防を南北に横断する形で掘られ、その際に弥生時代中期の遺構が破壊されて土器が出土する結果となったようである。水路の側面に表われた地層は、表土層(約50cm)下に黒色の粘質砂層があり、さらに下部には灰褐色砂礫層が続いていたという。その粘質砂層から砂礫層にかけて数箇所陥ち込みが認められ、件の土器群は陥ち込み遺構を中心に包含されていたとみられる。

この事実を紹介した東森市良は、これらの陥ち込みが「生活址の一部」とであると断じ、土器群については「弥生時代中期後半のごく限られた時期のもので、年代的幅のないことが注目される」との指摘を行なっている³⁾。われわれが、当面知りたいのは「ごく限られた時期」を弥生時代中期後半のどの辺りに比定するかということである。

東森は1980年、田畑遺跡の発見者である西尾克己と共に出雲平野の原始・古代遺跡を総覧した際に再びこの土器群の位置付けに触れ、その編年上の位置を「弥生時代中期中葉つまり矢野Ⅳ式の時期にあたる」とし、これが「神戸川西岸における集落の出現時期」を示すことを示唆した⁴⁾。ここでの問題点は、一つには件の土器群が従来いわれるような弥生中期中葉という時期幅をもつ段階の中で、さらに所属時期を細かく限定できるのかということである。この点では、東森の設定にかかる矢野Ⅳ式の型式内容と中期中葉という段階が時間的に等しく対応するかどうかの検討も必要となる。次には件の土器群が神戸川西岸域の集落出現期を果たして示しているかということが、当該地域における弥生時代集落の展開を考察する際の問題となろう。

われわれは、1987年に出雲平野の原始・古代遺跡の全域的な分布調査を行なったが、神戸川西岸において東西に延びる3列の自然堤防の存在を確認し、そのうち古志本郷遺跡、田畑遺跡、知井宮多聞院遺跡等が立地する第一列の自然堤防が弥生時代中期中葉には集落地として利用されるようになり、西岸の農耕的開発がこの自然堤防を起点として進んだことを想定した⁵⁾。このような認識は先の東森らの示唆を略りやく追認するものである。しかし、第一列自然堤防の基部に位置する古志本

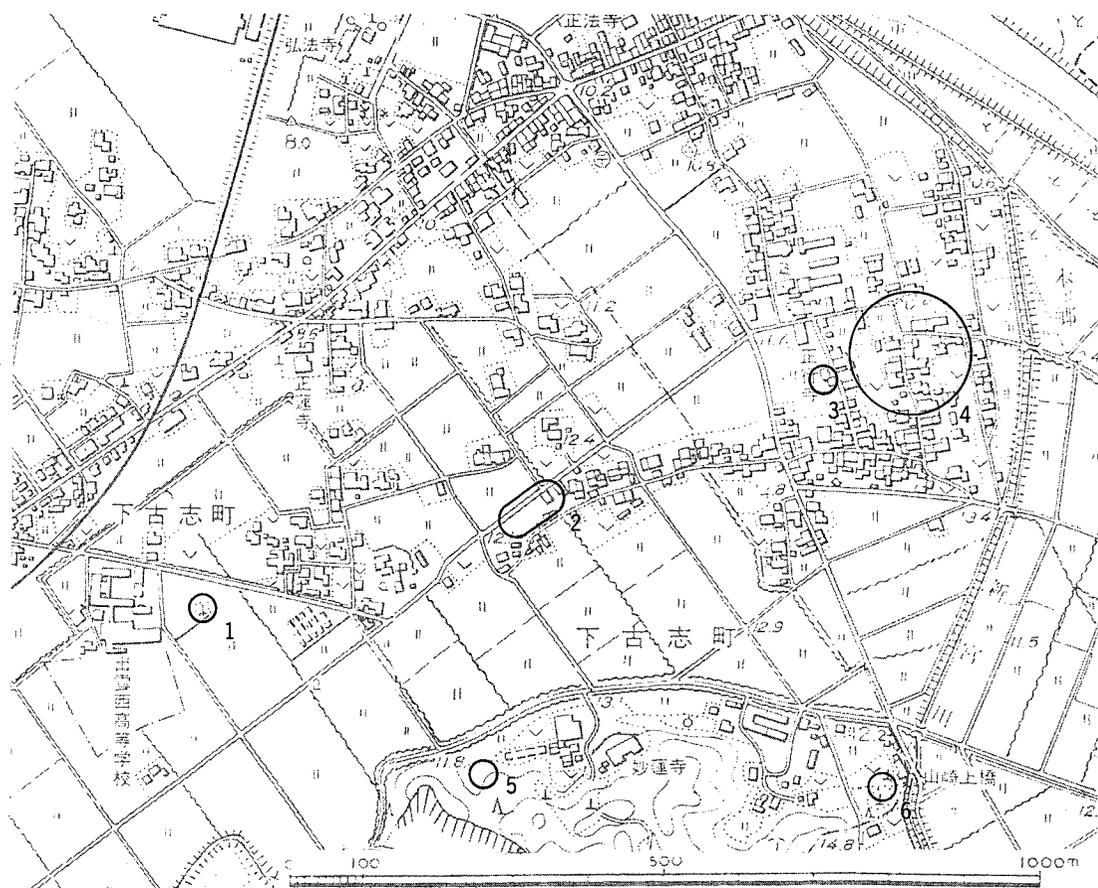
郷遺跡の調査が1987年末に実施されて多量の弥生土器、土師器、須恵器が採取されたが、その中では弥生時代中期中葉に属する土器群が本遺跡の上限を示している⁶⁾。この土器群と田畑遺跡出土の土器群を比較した場合、前者により古相が認められることは注意を要する。われわれが「ごく限られた時期」という表現にこだわる理由は、こうした弥生時代中期中葉でも新古の細別を求めるからに他ならない。

1988年11月から開始された出雲市教育委員会の調査は、1972年に遺構と遺物が検出された水路付近を中心に進められている。詳細は同教育委員会の報告を期して待つことになる

が、弥生時代中期の環濠の一部かと思われる遺構等が認められたようである。また弥生時代中期中葉の土器もかなり出土し、それらの形式的な特徴は1972年のそれと大差ないことが判明したとされている⁷⁾。島根大学保管土器の検討が必要な理由はここにもある。

III 田畑遺跡弥生土器の実相

本項では1972年出土の土器について記載的な検討を行なうこととする。島根大学に保管されている当該の遺物の中には土器の他に若干の石器が含まれているが、ここでは割愛し



第2図 田畑遺跡と周辺の遺跡

1. 宝塚古墳 2. 田畑遺跡 3. 大碓古墳 4. 古志本郷遺跡 5. 妙蓮寺山古墳 6. 放れ山古墳

たい。

土器片は約30点あり、そのうち器形を推定しうるものとして壺形土器片6点、甕形土器片3点、高環形土器片2点があり、他に頸部や胴部、底部等もみられる。以下それぞれについて説明を加える。

i) 壺形土器 1～6は壺形土器の口縁部である。1は口縁が大きく外反し、端部は粘土を貼り付けることによって下方に拡張している。口縁端部は中央がややくぼんだ面をもち、2条一単位の斜格子文が施されている。調整は外面の下方にタテまたはナナメ方向のハケメを施すほかはヨコナデである。色調は外面が淡灰色、内面が暗灰色を呈する。

2は口縁が外反し、端部はわずかに上方につまみ上げられている。口縁端部にはハケメ原体による刻目文と1条の凹線が施される。調整は内・外ともヨコナデで、色調は灰白色を呈する。

3は2と同様、大きく外反する口縁をもち、端部はごくわずかに上方につまみ上げられている。口縁端部には、2条の沈線とヘラ状工具による刻目文が施される。調整は内・外面とも強いヨコナデで、色調は灰白色を呈する。

4は口縁がほぼ水平方向に大きく開き、粘土を接合して口縁端部を下方に拡張している。垂直に近く立ち上がる口縁端部には3条の凹線とヘラ状工具による刻目文が施される。調整は、外面の頸部に近い位置にハケが施されている他はヨコナデである。

5は4と同様に口縁が水平に近く外反し、下方にも拡張されている。口縁端部はわずかに内傾して立上り、3条の凹線とヘラ状工具による刻目文が施される。また、口縁部の内面にも二指押圧の指頭圧痕突帯、2条一単位の斜格子文、クシ描波状文、刻目突帯、貼付

突帯等、種々の装飾がみられる。調整としては、内面はヨコナデの後に各種の文様を施し、外面はタテ方向のハケメを施した後にナデている。色調は灰白色を呈する。

6は、口縁部を粘土を貼り足すことによって拡大して朝顔形に外反させたものである。さらに上下に拡張した口縁端部にはヘラ状工具による刻目文と3条の凹線が、口縁部の内面にはクシ描の波状文、2条一単位の斜格子文がそれぞれ施されている。調整は、ヨコナデした後に内面には頸部に近い部位にヨコ方向の、外面では同じく頸部に近い部位にタテ方向のハケメ調整を行なっている。色調は茶灰色を呈し、外面には黒斑を有する。

これらの土器の焼成はいずれも良好で、胎土も2と3に1mm大の砂粒が若干含まれている以外は密である。

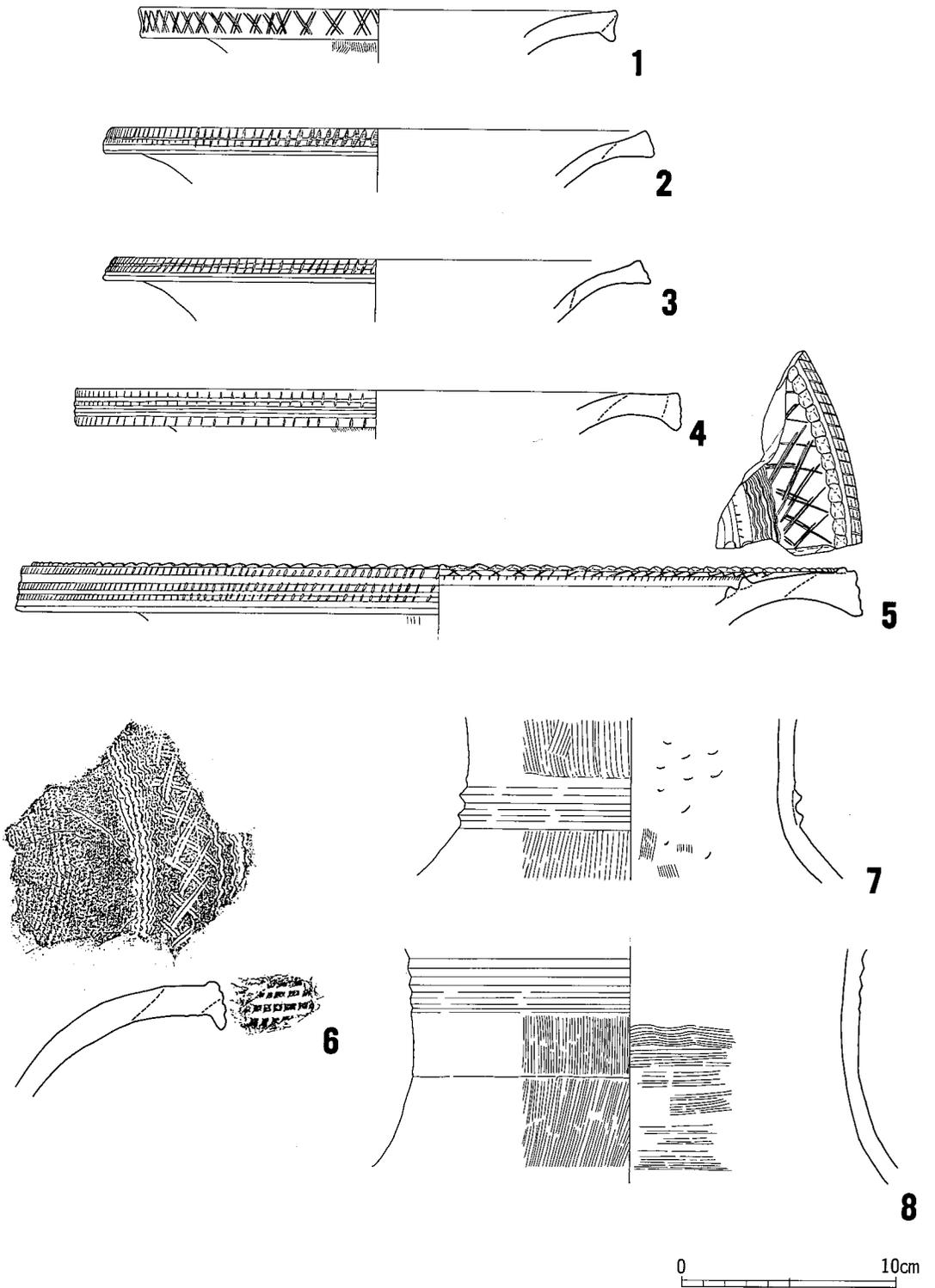
7、8は壺形土器の頸部である。

7は外面に2本の貼付突帯をもつ。調整は、外面がタテ方向の粗いハケメを施し、突帯文の部分のみはヨコナデである。内面は一部にハケもみられるが、ほとんどはナデである。

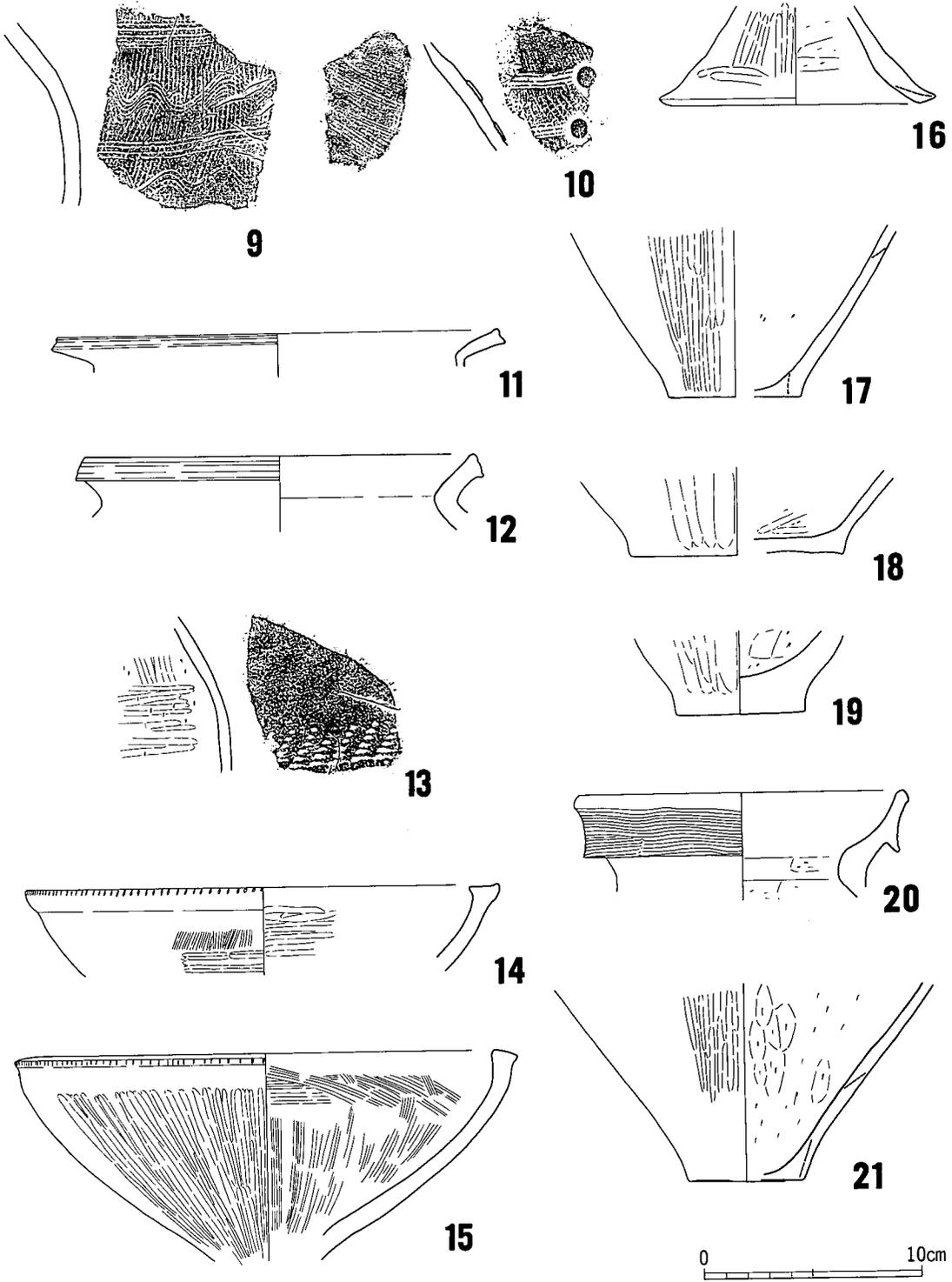
8は外面に「凹線文B種」と呼ばれる凹線文を5条以上もつ頸部の長い壺形土器と考えられる。調整は、外面がタテ方向のハケメ、内面はヨコ方向のハケメをそれぞれ施している。7、8とも胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は7が灰白色、8が暗灰色を呈す。

9も壺形土器の胴部である。外面にクシ描の直線文と波状文が2組施されているが、上位の組は6本で一単位、下位のもの4本単位と、異なった工具を使用していることが伺える。調整は、外面が粗いタテ方向のハケメ、内面はナデを施す。

10も壺形土器の胴部である。外面に4本単位のクシ描文を2組施し、その上に円形浮文



第3図 田畑遺跡採集の土器(1)



第4図 田畑遺跡採集の土器(2)

を貼りつける。またクシ描文帯の間にはヘラ描の斜格子文がみられる。調整は、外面がタテ方向のハケメ、内面がヨコ方向のハケである。

9～10の土器はいずれも胎土が緻密で、焼成は良好である。色調は、9が灰褐色、10は茶灰色を呈する。

ii) 甕形土器 11, 12は甕形土器の口縁部である。11は口縁が「く」の字状に外傾する。口縁端部は内傾し、そこに2条の浅い凹線が施される。器壁の厚い土器で、調整は内・外面ともにヨコナデ。色調は茶色がかった黄色を呈している。

12は口縁が鋭く外傾し、器壁はかなり薄い。口縁端部はやや肥厚し、1条の凹線を施す。調整は内・外面ともヨコナデである。色調は茶白色を呈する。

11, 12ともに焼成は良好で、胎土はいずれも緻密。外面には煤が付着している。

13は甕形土器の胴部である。外面には6本単位のクシ状工具による刺突文がみられる。調整は、外面がヨコナデと思われ、内面はタテ方向のヘラケズリを施した後に上位はタテ方向のハケメ、中位から下位にかけてはヨコ方向のヘラケズリを行なっている。焼成は良好、胎土は緻密で、色調は、外面が茶灰色、内面が暗灰色である。

iii) 高坏形土器 14, 15は高坏形土器の坏部である。14は端部がわずかに肥厚し、そこに刻目文が施される。調整は、端部が内・外面ともにヨコナデで、坏部外面は中位がタテ方向のハケメ、下位がヨコ方向のヘラミガキである。色調は茶灰色を呈する。

15も、刻目文を施した端部がわずかに肥厚するが、14と異なり端部上面が内傾気味となる。調整は端部ヨコナデ、坏部内面にはナナ

メ方向のハケメが施され、外面はタテ方向のヘラミガキである。色調は内面が黄白色、外面は茶白色を呈する。

焼成は14, 15ともに良好。胎土は、14は緻密であるが、15は1mm大の砂粒を多少含む。

16は高坏形土器の脚部片と思われる。外面に透孔、文様は認められない。端部が鋭く外方に傾く。調整は外面がタテ方向のヘラミガキ、端部はヨコナデである。内面は上半部にヘラケズリを施し、下半部から端部にかけてはナデている。色調は茶灰色で、胎土は緻密、焼成良好である。

iv) 底部 17, 18, 19は土器の底部である。17は平底で、緩やかに外湾しながら胴部に続く形を示す。2カ所に接合痕が認められる。調整は、外面がタテ方向のヘラミガキ、底はナデである。内面は砂粒の移動痕を確認できるが、磨滅していて詳細は明らかにしえない。色調は外面暗い茶色、内面は黒灰色を呈する。

18は上げ底気味で、外湾しながら胴部に移行するものと考えられる。器壁は薄く仕上げられている。調整は、外面が単位の大きなタテ方向のヘラミガキ。底はナデ、内面は表面的にはナデを施していると思われるが、底に近い部位では砂粒の移動痕が見られるのでヘラケズリが行なわれた可能性もある。色調は内・外面とも暗い茶色を呈するが、部分的には黒灰色に変化しているところも認められる。

19は、わずかに丸底気味をなす粗雑なつくりの底部片である。器壁はかなり厚い。調整は外面がタテ方向のヘラミガキ。胴部の最下部から底にかけてはナデている。内面には砂粒の移動痕が見られるが、判然とはしない。色調は暗赤褐色を呈する。

20, 21は1972年の土器出土の後に田畑遺跡

で表面採集されたものである。

20は甕形土器の口縁部である。口縁は複合化し、外反する口縁端部にはクシ様の工具による13条の沈線が施される。調整は、口縁部内面はヨコナデ、頸部以下はヘラケズリである。頸部外面はヨコナデを施す。器壁は厚く、胎土は緻密、焼成は良好で、色調は、内面が茶灰色で、外面は灰褐色である。

21は底部である。器壁は薄く、2カ所に接合痕がみられる。わずかに上げ底気味の底をもち、直線的に胴部に移行する。調整は、内面がタテ方向のヘラケズリで、最下部はナデである。外面は上半はタテ方向のヘラミガキを施し、下半部はナデと考えられる。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は、内面が淡灰色、外面は黒味があった茶色を呈する。

以上、田畑遺跡出土の弥生土器について、一通りその記載的な記述を終えたところでこれら土器群が示す形式的な特徴点について要約しておきたい。ここに表示した土器群は、一見して明らかなように、1974年に田畑遺跡において表面採集したものとされる20、21の土器片を除けば、いずれも弥生時代中期の所産にかかわるものである。問題は、その諸特徴をもって中期の内でもどのような段階に属せしめることが可能かにある。注目される点は次のような諸点である。

壺形土器にあっては、1～3本の凹線文に刻目文、貼付突帯文等を組合せたものが主流をなし、これにわずか1点ではあるが斜格子文のみ施したものが加わっている。凹線文のみの施文は壺形土器においては認められない。しかし甕形土器は器壁の厚いものと薄いものの二種が存在するが、いずれも口縁部がわずかに肥厚し、端部に凹線文が施されているのである。

高坏形土器も口縁が肥厚し、端部に刻目を施している、脚部には施文されないが、内面にヘラケズリがみられる点に注目したい。土器底部については、磨滅が著しいので詳細は不明ながら、ヘラケズリ技法の駆使されたことを伺わせる事実の存在が重要であろう。

IV 山陰地方における弥生時代中期土器の編年観の変遷と田畑遺跡の弥生土器

この項では前項までに検討した田畑遺跡出土の弥生土器について、その年代的な位置付けを行なうこととする。この作業は次の2点について考察を加えることによって進める。第1点は、山陰、とくに出雲地方における従来の弥生時代中期土器の変遷観、とりわけその段階区分がどのような指標に基づき、何段階に区分されてきたかについて弊見し、継承すべき観点と問題点を明らかにすること。第2点は、昨今の大規模な弥生時代の遺跡調査の成果、就中中期土器の編年のありようを検討し、第1点の考察を踏まえて田畑遺跡出土の弥生土器の年代的位置を相対的に定めることである。

1) 山陰地方における弥生時代中期土器の編年観の変遷

山陰地方における弥生土器の編年が、山陽地方、近畿地方あるいは北九州地方のいわば弥生土器研究の先進地の成果を、主として援用ないしは借用することによって構築されてきたことは否定すべくもないことであろう。当地方の弥生土器研究の展開については1981⁹⁾年に東森がこれを概括しているところである。それらを参照しつつ弥生中期土器の変遷観と段階区分の仕方をみておこう。

i) 知井宮 I～II 式土器と上野 III～IV 式土器¹⁰⁾ 出雲市知井宮多聞院遺跡と鳥取県上野遺跡¹¹⁾の調査・研究は、山陰地方の弥生時代研究、そのフレームワークともいえる土器研究の基礎を創り出したという点で忘却できないものである。知井宮多聞院遺跡の調査は1958年に行なわれている。この遺跡は弥生土器や古式土師器を出土する貝塚として早くから知られていた。このような遺跡のあり方は、折から「プレ和泉」などの通称でその探査が課題とされていた古式土師器の調査・研究にとってきわめて好適な条件を備えたものとして注目されたのである。

発掘調査の結果は、下位より①黒褐色土層＝知井宮 I 式土器、②混貝土層 III＝知井宮 II 式土器、③混貝土層 II＝知井宮 II 式～知井宮 III 式土器、④混貝土層＝知井宮 III 式～知井宮 IV 式土器、⑤混土貝層＝知井宮 IV 式土器というように、貝層の堆積順に対応する弥生時代中期から古墳時代前半期にいたる土器型式の漸移的な変遷が捉えられるにいたった。われわれの課題からすると、ここでは知井宮 I 式、知井宮 II 式土器が検討の対象となる。

知井宮 I 式土器は、壺形土器において「櫛目文手法」が盛行し、甕形土器の口縁部が逆 L 字形もしくは「く」字状に強く屈曲することに特徴を見出している。このような形態上の特徴は、広島県中山遺跡の中山 IV 式土器、兵庫県千代田遺跡の千代田 III 式土器に共通するとして知井宮 I 式土器を弥生時代中期の後半に位置付けたのである。また知井宮 II 式土器については、これが出土層位から I 式土器に連続する土器型式であることを確認し、さらに土器の施文にあらわれた凹線文や「櫛と貝殻腹縁」による刺突文、斜線文等の存在から、岡山県南の上東式土器に対応する山陰地

方の弥生時代後期の一型式であるとしている。

知井宮多聞院遺跡の発掘調査から導かれたこのような土器型式の設定及びその段階的な位置付けは、杉原荘介等が当時進めていた弥生土器の全国的な編年作業とその編成にかかわる考え方によったものである。杉原等は弥生時代を前・中・後の 3 時期に大区分し、さらに各期を前後の 2 期に分けるフレームを設け、中期については櫛目文土器の出現と盛行の時期としてこれを中期 I、中期 II に区分している。また櫛目文と凹線文の交替を後期前半に置き、後半には凹線文の退化、無文土器や複合口縁土器の出現をみようとしている¹²⁾。

弥生時代中期と後期の境界を弥生土器の様式変遷過程のどこに置くかは、今日でも明快な決着がつけられていない。したがって、知井宮 I 式～IV 式の設定と段階的な位置付けは当然歴史的なものであると同時に、杉原等に固有のものであることを確認しておく必要がある。当地方の弥生土器研究の現状に即していえば、知井宮 I 式の甕形土器の口縁部の形状には中期後葉とされる要素が認められるようであり、知井宮 II 式についてもこれを細分して中期後葉から後期への移行期の所産として扱うことも可能と思われる。

知井宮多聞院遺跡の調査・研究が古式土師器の探求から出発して山陰地方における弥生時代後半期の土器の変遷史を編み出したのに対して上野遺跡のそれは弥生時代前半期の土器変遷の大綱を示したことに第一の意義がある。その変遷観にあらわれた問題点——研究史上の到達点と資料の不足に伴う制約からくるもの——については、磯田由紀子がすでに指摘しているところである¹³⁾。われわれの当面の関心は上野 III 式と同 IV 式に向けられる。

平行する多条の櫛目文が顕著にみられる上

野Ⅲ式は、山陰地方における弥生時代中期初頭ないしは前葉の土器型式として現在でもその位置付けは動かない。問題は上野Ⅳ式である。これについては出土資料が極端に乏しく、型式認定の基本的な条件を欠いている。調査者の意図は、おそらく上野Ⅲ式に後続する一型式が存在することを示唆するところにあつたのではなからうか。とすれば上野Ⅳ式をもって知井宮Ⅰ式に並行させることは本来無意味とならう。いずれにしてもこうした弥生時代中期の土器変遷史にかかわる問題は、段階的フレームそのものの設定の仕方と中期中葉の好資料による編年の確立にかかっているといえる。

ii) 中期2区分論と3区分論 山陰地方の弥生土器研究にあつて、その先導的な役割を果たしてきたのは山本 清と東森市良の2氏である。山本は1964年¹⁴⁾と1969年¹⁵⁾にまとめた編年を公表しているが、それらの所論においては中期2区分の立場をとっている。これを要約的に示すと、中期前半は櫛目文の盛行期とし、後半は櫛目文の多様化と突帯文の盛行を指標として段階区分している。注目されることは、前半の土器でもやや後出の要素をもつものがみられることをもって、これを「中期中葉」の表現を用いて後半の土器群との繋がりを考えていることである。また後半の土器群が、山陽地方の中山Ⅳ式や菰池式に対比できるとしていることも注意される。

東森は1971年に山陰地方の弥生文化について総括的な論考を公にし、そのなかで弥生土器の変遷を論じている¹⁶⁾。中期2区分の立場は山本と同様であるが、2区分とするか3区分とするかは論の分かれるところとしながら、自らは3区分の可能性を考慮した2区分説をとっている。具体的には中期後半の壺形土器

の解説において、その一種に土井ヶ浜Ⅱ式に共通する要素がみられることなどから「Ⅳ期(中期後半のこと、田中註)の前半、Ⅲ期(中期前半のこと、田中註)に接する時期の所産」との位置付けを与えている。また中期後半の指標として指頭圧痕文が盛んに用いられることもあげる。

以上の概観から知られるように、1970年頃までは櫛目文ないしはクシ描文の展開を中期という大枠で捉え、その消長過程を区分するという仕方編年が進められたのであつた。

弥生時代中期の3区分論が明確な形で提示されたのは1977年の『八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ 弥生式土器集成』(以下『紀要編年』)においてである。3期区分の論拠については次のように述べられている。「ここでは中期を瀬戸内方面との関係が強く、基本的にクシ描文で統一的に把握し、櫛目文の展開と衰退、他地域との対比の上からⅢ、Ⅳ、Ⅴ期の3期に区分しようとするものであり、特にⅣ期に関しては天神遺跡の資料などからこれを櫛目文の全盛期としてとらえる立場を」とるとし、各期は畿内の第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳ様式に対比できるとも主張している。つまり中期に支配的な施文を櫛目文と認定したうえで、その展開相によって小期を置くとする考え方は先の山本・東森の編年観と同一である。ただ、このような3期区分が畿内の第Ⅲ～Ⅳ様式とも対応するという見解が新しい。この集成作業を主導した東森が1981年にはそれまでの弥生土器研究を総括したことは先に触れたが、中期の枠組みと変遷観には変化はみられない。

2) 田畑遺跡出土土器の編年的位置

先に記載した田畑遺跡出土の弥生土器は、東森等によって弥生時代中期中葉に属するとされてきた。氏等のこれまでの編年観に従え

ば、その第Ⅳ期つまり櫛描文の全盛期の所産であり、畿内の第Ⅲ様式に対応するということになる。このような位置付けは可能であろうか。本項では中期という大枠の取り方とその内容を最近の中期弥生土器編年の到達点に立って検討してみよう。問題の焦点は凹線文とヘラケズリ技法の発達過程をどう認定し、評価するかにある。

まずは中期弥生土器の編年がほぼ確立していると思われる山陽地方の編年のありようについて概観する。岡山県百間川遺跡¹⁷⁾の編年(以下百間川編年とする)では、中期を百・中・Ⅰ、百・中・Ⅱ・百・中・Ⅲの3時期に区分し、さらに各時期を細分して古相・新相と表記することにより実質的には8小期に区分している。これを施文のありようから概括すると、百・中・Ⅰは櫛描文の展開、百・中・Ⅱは菰池式を中心とする時期で、壺形土器の頸部の突帯文と凹線文の出現、百・中・Ⅲは凹線文の盛行といった現象によって各時期が特徴付けられている¹⁸⁾。

そこでこの百間川編年において凹線文と内面ヘラケズリ技法がそれぞれどの時期から現われるかをみていくと、凹線文は百・中・Ⅱの中相において壺形土器の口縁部にまず現われ、新相では甕形土器と高坏形土器にもまれに施されるようになる。内面ヘラケズリ技法は、百・中・Ⅱの新相においては、壺形土器や甕形土器の胴部の下半、高坏形土器や台付鉢形土器の脚部にもみられるようになることからこの時期にほぼ一般化すると報告されている¹⁹⁾。

次には鳥取県青木遺跡の調査による青木編年の弥生時代中期の項を概観する。ここでは中期中葉を青木0期、中期後葉を青木Ⅰ期として²⁰⁾いる。Ⅰ期はさらに壺形土器頸部の文様

の変化、甕形土器頸部の圧痕突帯における施文具の変化などから、古・中・新の3期に細分されている。青木0期の場合、壺形土器は短頸壺のみであり、甕形土器には凹線文は認められず、内面胴部下半がヘラケズリされているのである。こうした甕形土器にみられる内面胴部下半のヘラケズリ技法とそのプロポジションとから、0期が百間川編年の百・中・Ⅱの新相に併行するとの見解が示されている²¹⁾。

同じく鳥取県西部で注目されるのは下山南通遺跡²²⁾である。この遺跡では弥生時代中期中葉から後期にかけての土器が多量に出土している。その土器群中・南部遺構群に伴って検出された土器群は、遺存状態が良好で、器種も多様であり、かつ一括性に富むことから編年資料としてきわめて価値が高い。この土器群では、壺形土器は櫛描文と突帯文を用いた装飾性の強いもので、胴部内面下半にはヘラケズリ技法は施されていない。甕形土器は口縁が「く」の字状に屈曲し、端部をわずかに肥厚させるもので、胴部内面下半にはヘラケズリ技法が用いられている。高坏形土器は口縁端部がわずかに肥厚するものや水平方向に開くものなどがあり、脚部内面にはヘラケズリ技法は認められない。

以上の土器に特徴的なことは、どの器種にも凹線文はみられないこと、甕形土器の内面胴部下半にヘラケズリ技法が用いられていることである。下山南通遺跡の調査者は、この二つの点から先の青木遺跡における青木0期と出雲市天神遺跡出土の土器との対比を行っている。そこから天神遺跡の甕形土器で、凹線文を施さず、内面胴部下半にヘラケズリ技法のみられない甕形土器をもって弥生時代中期中葉の古段階の所産とし、内面胴部下半に

ヘラケズリ技法の使用が認められた青木0期の甕形土器を、中葉の新段階とする考えを明らかにしている。さらにこの種の甕形土器には、凹線文は施されていないことをもって青木0²⁴⁾期でも古相とする認識を示している。

次に出雲地方東部における弥生時代中期の土器変遷の様相について概観する。当地方では先に触れたように、櫛描文の導入と展開、及びその衰退が中期の細分の指標とされ、それをもって前葉、中葉、後葉の3小期に区分²³⁾してきている。また内面ヘラケズリ技法の評価については、胴部全体にヘラケズリが施されたような場合に初めて時期表示の特徴として理解されてきた感があり、そのことと複合口縁の成立を合わせて弥生時代後期のメルクマールと捉えることが行われてきた。

しかし最近、松江市石台遺跡²⁶⁾、同市西川津遺跡²⁷⁾等の発掘調査によって検出された弥生時代中期後葉に属するとみなされる甕形土器の中には、内面胴部下半にヘラケズリの施されている例の存在²⁸⁾することが判明している。また、松江市布田遺跡においてはⅢ区S D10と命名された溝状遺構出土の土器群を中心として、弥生時代前期から中期末までの土器編年²⁹⁾が組立てられている。これを中期について立ち入ってみると、第Ⅲ期が櫛描文の出現の時期で、中期初頭に該当させている。第Ⅳ期が『紀要編年』のほぼⅢ期に、第Ⅴ期、第Ⅵ期がそれぞれ『紀要編年』のⅣ期とⅤ期に対応する。

以上岡山南部、鳥取西部、出雲東部の3地域における弥生時代中期の土器編年の概略を述べてきたわけであるが、最後にこれらの土器編年との対比から田畑遺跡出土の土器の編年的位置を考えてみたい。

百・中・Ⅱの新相との比較でみると、この時期の甕形土器にはほとんど施されない凹線文が、田畑遺跡出土の甕形土器にみられることからそれよりも新しく、百・中・Ⅲの古相に併行するのではないかと思われるが、なお高坏形土器の坏部、脚端部に凹線文がみられないことを考慮すれば百・中・Ⅲの古相内でもより古い段階に位置付けられるのではないだろうか。

また下山南通遺跡の土器群のように、凹線文をもたず、櫛描文を多用するものに、すでに内面胴部下半にヘラケズリが用いられる点や、百間川遺跡の百・中・Ⅲの古相で凹線文が一般化する点などを考えると、出雲地方においても、内面胴部下半のヘラケズリ技法の導入は凹線文の導入に先立って行われることが十分に推察できる。すなわち、内面ヘラケズリ技法はすでに弥生時代中期中葉の新段階において当地方においても用いられ始め、凹線文の導入は中期後葉の指標となるのではないだろうか。

以上より、田畑遺跡出土土器の編年上の位置は弥生時代中期後葉に比定することができるといえる。ただ、壺形土器の中に凹線文とともに櫛描文をもつものや、2条単位の斜格子文のみを施するものがあることから、弥生時代中期中葉の新段階にさかのぼる要素も残しているといえよう。

V 結 語

1972年出雲市田畑遺跡で発見された弥生土器の編年上の位置付けを企図して論を重ねてきた。結語として到達点を要約するならば、この土器群は、弥生時代中期中葉の特徴をもちつつも段階的にはすでに中期後葉に踏み込

んだものと判断された。その根拠は甕形土器の口縁に凹線文がみられることと、すでにヘラケズリ技法が駆使されている様子が伺えたこととにある。従来の中期弥生土器の編年観からしても中期後葉に該当させることにもなる。東森等がこれを敢えて中期中葉としたのは壺形土器の文様を重視したからに他ならない。しかし凹線文の登場と内面ヘラケズリ技法の発達に土器変遷の指標を求めるならば、結論は上記のように導かざるをえないとするのがわれわれの態度である。

田畑遺跡の土器を弥生時代中期後葉古段階に位置付けることが可能ならば、既に知られている古志本郷遺跡出土の弥生時代中期の土器群には、これに先行する特徴を有する土器も存在しているので、田畑遺跡が後出の集落址ということが推定されてくる。つまり神戸川西岸の弥生時代集落の展開が古志本郷遺跡を母胎として進行したとみるわれわれの想定は、ここに一つの証言をえたことになるが、結論を急ぐことはできない。課題は西岸地域の一つ一つの集落遺跡の丹念な調査・研究の積み重ねによって果たされねばならないからである。その意味ではこの一文は、その前提作業の一端をなすに留まるものである。

あとがき

島根大学に保管中の田畑遺跡出土の弥生土器について、その再検討を提起されたのは西尾克己氏である。理由は、この土器群が出雲平野の弥生時代集落の変遷史研究に看過出来ない様相を示しているからである。稿を終えるに当たり、西尾氏の提起の意図に十分応ええたかを危惧するものであるが、不十分な考察等も合わせて寛容を願う次第である。同時

に氏の勧めに対して改めて感謝の意を表したい。

また、いつもながら広江耕史、桑原真治、川上稔の各氏からは種々の教示を頂いた。記して謝意を表する次第である。

本論における田中、宮本の分担は以下の通りである。

田中義昭、I、II、IVの前半、V。宮本正保、III、IVの後半。なおII、IVの記述に当たっては田中、宮本の討議により進めた。文章の表現等の統一は田中が行った。図版の作成はすべて宮本による。

註1) 田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本 清・磯田由紀子「出雲市矢野遺跡の研究」(『山陰地域研究』第3号)、1987年。

田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」(『山陰地域研究』第4号)、1988年

2) 大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」(『考古学集刊』第2巻1号)、1963年

3) 東森市良「破壊に瀕している低地性遺跡——出雲市矢野遺跡、下古志遺跡、天神遺跡の場合——」(『季刊文化財』第20号)、1973年

4) 島根県教育委員会他「出雲・上塩冷地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」、1980年

5) 註1)田中・西尾論文、1988年

6) 出雲市教育委員会「古志地区遺跡分布調査報告書」、1988年

7) 出雲市教育委員会が、3年計画で進めている神戸川西岸域の遺跡分布調査と既発見遺跡の範囲確認調査の一環として田畑遺跡の調査が行われた。調査担当者の川上稔氏(出雲市教育委員会社会教育課)によれば、1972年に弥生土器が検出された地点を中心に試掘坑を設定して掘り下げたところ、弥生時代中期中葉の溝状遺構や

- 住居址、土壙等が検出され、この遺跡が環濠集落であった可能性が出ているということである。
- 8) 小林行雄・佐原 真『紫雲出』, 1964年, 詫間町文化財保護委員会
 - 9) 東森市良「入門講座・弥生土器——山陰1・2・3——」(『考古学ジャーナル』185・188・192), 1981年
 - 10) 註2)に同じ
 - 11) 倉光清六・藤田等「山陰弥生土器の研究(1)——鳥取県西伯郡所子・上野遺跡——」(『考古学雑誌』第48巻2号), 1962年
 - 12) 杉原荘介「日本農耕文化生成の研究」(『明治大学人文科学研究紀要』2), 1963年
杉原荘介・大塚初重「弥生式土器」(『日本原始美術』Ⅲ), 1964年, 講談社
 - 13) 磯田由紀子「山陰地方における前半期弥生文化の一考察」(『鳥根考古学会誌』第5集), 1988年
 - 14) 山本 清「山陰地方Ⅱ」(『弥生式土器集成・本編Ⅰ』), 1964年, 弥生式土器集成刊行会
 - 15) 山本 清「山陰」(『新版日本考古学講座』4), 1969年, 雄山閣
 - 16) 東森市良「山陰における農耕文化の開始(1), (2)——弥生文化の展開をめぐって——」(『山陰史談』第3, 第5号), 1971, 1972年
 - 17) 岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡Ⅰ」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39), 1980年
 - 18) 岡山県教育委員会「百間川兼基・今谷遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52), 1982年
 - 19) 註18)に同じ
 - 20) 青木遺跡調査団「青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ」, 1976～1978年
 - 21) 註18) P485～P486
 - 22) 鳥取県教育文化財団「下山南通遺跡」, 1986年
 - 23) 註22)に同じ
 - 24) 註22)に同じ
 - 25) 東森市良・前島己基・松本岩雄「八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅰ 弥生式土器集成」, 1977年
 - 26) 「石台遺跡」『国道九号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(Ⅳ), 1983年
 - 27) 鳥根県教育委員会「朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ(海崎地区2)」
 - 28) 註26)に同じ
 - 29) 「布田遺跡」『国道九号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』(Ⅳ), 1983年